

文章完成法による自己と家族との関係の表現について

—— 青年期以降の未婚者を対象として ——

臨床心理学科 荒 井 真太郎

抄 録

本研究においては、未婚の男性156名（15歳～67歳）、未婚の女性156名（15歳～69歳）を対象として、文章完成法により自己と家族との関係についてインターネット調査を行い、年齢層、性別、家族との居住形態による特徴について検討した。回答は、主カテゴリー、付加カテゴリーに分類され、複数のカテゴリーに属する回答のパターンを分析した。各カテゴリーの回答数の比較から、家族と自己の支持的な関係、無関心、家族の不在などに関して、性別、年齢層、居住形態による特徴が明らかにされた。独居状態にある未婚者に関しても文章完成法による家族イメージへのアプローチの可能性が示された。

Key Words：自己と家族との関係、文章完成法、青年期以降の未婚者

I. 問題と目的

1. 家族イメージへのアプローチ

家族に関して個人が抱いているイメージは、パーソナリティに深く関わっている。馬場（1990）は、原家族の中で形成された、両親、夫婦、同胞などのイメージが、結婚家族を形成してゆく際にも影響し、結婚家族の中での家族力動を生み出す要因となる、と指摘している。出生時においては親や養育者がほぼ24時間体制で関わり、その後も密接かつ長い時間をかけて養育することから、その養育者との関係が子どもの人格発達全体に与える影響は極めて深く大きい。

家族に関するアセスメントツールとしては、様々な質問紙尺度が開発されており、HamiltonとCarr（2016）は、家族アセスメントの尺度

を整理して、家族のコミュニケーション、問題解決、家族の感情の凝集性、家族のルール、家族における役割と日常的な活動などの下位次元にまとめている。家族アセスメントの尺度は、家族療法における治療的な変化を査定するために、現実の家族生活の中で特定の次元について焦点づける形のアセスメントツールとしての意味がある。ただ、このような家族アセスメントのツールは、主としてアメリカにおける親と未成年の子どもからなる家族を想定して作成されたものであり、日本において近年増加している夫婦のみの家族や老年期の親と中年期に入った子どもからなる親子というような家族は想定されていない。また、家族の生活の標準的あり方は、国による文化的な違いのみならず、国よりも小さな単位で地域的な違いや、社会的階層による違いもある。さらに、家族内には、祖父

母、父母（夫婦）、長子、末子、中間子という立場があるため、それぞれの立場により、同居家族の生活に対する見方や、感じ方も異なることがありうるので、尺度形式の家族アセスメントの標準化は困難である。一方、文章完成法は質問文を短くして回答に自由度を持たせることで、多様な家族にに応じて、また家族内の複数の立場に対しても適用が可能なアセスメントツールとなる。

2. 文章完成法による家族イメージの表現

文章完成法は、現実生活に関わる情報を心理テストという形で効率的に得ることができると同時に、回答内容において、願望・空想が表現されるため、投影法的側面を持っているテスト法である。日本では、精研式文章完成法が標準化されており、全60項目中には家族に関わる項目が含まれているため、人格全体を査定するために家族に関する情報が組み入れられる形となっている。

文章完成法を用いて家族関係や家族イメージにアプローチした研究として、星野（1984）は、老年期のうつ病、神経症の患者を対象として、文章完成法により表現された家族イメージを肯定的反応、中立的反応、否定的反応に分類して分析を行っている。岡本（1996）は、育児期における女性のアイデンティティと家族関係についての研究において、子育てや夫との関係に関する文章完成法の項目を設定して分析を行っている。岡本は、文章完成法における各項目について、それぞれ高次のレベルから低次のレベルを設定し、高・中・低の3段階に回答を分類して、アイデンティティとの関連を検討した。岩田・森・前原（1998）は、出生後2～5カ月の乳児を育児している父親を対象とした調査において、育児に関する文章完成法の項目を設定して、それらに対する回答を肯定的反応、否定的反応、中立的反応、両価的反応、両性的

反応の5カテゴリーに分類して分析を行っている。

上記の文章完成法を用いて家族関係や家族イメージにアプローチした研究においては、文章完成法における回答を、肯定的－否定的、積極的－消極的・拒否的、などの次元で、3～5段階に分類するという分析方法が採用されている。一方で、中尾・加藤（2003）は、愛着スタイルと家族表象の関連を検討するため、家族イメージについての文章完成法の回答内容について、テキストマイニング分析を用いて、「関係性」「行為」など10クラスターに分類した上で分析を行っている。

荒井（2012）は、家族イメージの研究として、文章完成法（SCT）を用いて、青年期の未婚群と成人期の既婚群を対象として、子の立場と親の立場での家族イメージの比較検討を行った。荒井は、①家族・家庭と自己との関係、②家族関係・構造、③家族成員の役割・イメージ、④家族の意味・価値観、⑤家族に関する時間的展望、⑥家族の適応性、⑦家族の凝集性、⑧家族の同一性、の各次元に関わる23項目ごとに回答内容をKJ法を用いてカテゴライズし、既婚（成人）群、未婚（青年）群ごとに分類されたカテゴリーの出現頻度を分析した。主な結果として、既婚（成人）群と未婚（青年）群では、家族・家庭と自己との関係に関して、「家の人はわたしに対して」の項目に対する回答傾向に有意な差が認められなかったのに対し、「わたしは家の人に対して」の項目においては、回答傾向に有意な差が見られた。つまり、家族と自己との関係の次元において、「自己から家族に対して」と「家族から自己に対して」という方向性に重要な意味があることが示唆された。ただし、この研究の問題点として、サンプリングの問題があり、既婚（成人）群、未婚（青年）群の比較となっているため、両群の差が、未婚か既婚かという差ではなく、単に

両群の平均年齢の違いによる差である可能性がある。そのため、青年期以降の年代を含めた未婚者を対象とすることが必要である。

3. 自己と家族との関係に対する回答について

荒井（2012）の文章完成法における、自己と家族との関係に関しては、「家の人はわたしに対して」と「わたしは家の人に対して」への回答内容の分類カテゴリーを、共通のものに近づけるように設定されている。「家の人はわたしに対して」の項目への回答の分類は、上位カテゴリーとして、「関心のあり方」、「位置的関係」、「コミュニケーション」、「両価性・不定」、「変化・頻度」、「願望」、「その他」の7カテゴリーとされ（このうち、「両価性・不定」、「変化・頻度」、「願望」のカテゴリーは他のカテゴリーと併存した形でカウントする付加カテゴリーとされている。）、「関心のあり方」は、「支持・受容・肯定的態度」、「依存・期待」、「無関心・不満」、「非難・厳格な態度」の4つの下位カテゴリーに分類された。一方の、「わたしは家の人に対して」の項目への回答は、上位カテゴリーについては、「家の人はわたしに対して」と同様として、「関心のあり方」の下位カテゴリーが、それぞれ「支持・受容・肯定的態度」、「依存・期待」、「不満・否定的態度」、「非難・厳格な態度」、「無関心・無為」、「役割・責任」の6カテゴリーに分類されている。

上記の「家の人はわたしに対して」および「わたしは家の人に対して」の2項目についての回答内容は多様であり、カテゴリー化が困難で、家族関係に関する、カテゴリー化しづらい個別性や多様性が表現されていた。そのため、荒井（2015）は、未婚（青年）群を対象として、改めて自己と家族の関係に関する項目への回答についての分析を行った。荒井（2012）の研究では、自己と家族の関係に関する項目の

回答内容について、10～12カテゴリーに分類したが、個々の回答は、複数のカテゴリーに属することが出来る形としており、分析においては、回答に含まれている個々のカテゴリーの度数について分析の対象としていた。そこで、複数のカテゴリーに属する回答について検討するために、荒井（2015）は、複数のカテゴリーに属する回答を分析の対象として、「家の人はわたしに対して」の回答については40グループに分類し、「わたしは家の人に対して」の回答については49グループに分類した。その結果、家族と自己の双方向から支持し合っている関係にあることを示す回答のパターンや、家族からは「過保護」な扱いを受けているが、家族に対しては「迷惑をかけている」という回答のパターンが見出された。

荒井（2015）の研究も、調査対象者が未婚（青年）群であり、限られた発達段階における自己と家族の関係の特徴の一端を示したものであるため、年齢層を広げることが課題であり、さらに男女別の回答傾向の違いについても分析されていない。また、調査対象者の年齢層や、人数を増やした場合に、自己と家族の関係に関わる項目の回答については、複雑で分類が困難な回答がしばしば見られるため、従来の研究において用いたカテゴリーの再検討を行うことも必要である。

4. 青年期以降の未婚者へのアプローチ

家族の生活は、社会情勢や時代背景の影響を受けており、少子高齢化が急激に進行する現代の日本においては、核家族が一般的な世帯とは言えず、単独世帯が最も割合の高く、今後もさらに高くなると予想される。国立社会保障・人口問題研究所の人口統計資料集（2018）によると、50歳時の未婚者の割合が、男性で約23.4%、女性で約14.1%とされている。また、2018年に公表された国立社会保障・人口問題

研究所による「日本の世帯数の将来推計」によると、2015～40年の間に「単独」世帯は34.5%から39.3%に増加すると予想されている。未婚のまま中年期に達し、一人住まいか、高齢の親と同居する生活形態となる場合も増加傾向にあると考えられる。同じく、「日本の世帯数の将来推計」によると「夫婦のみ」世帯は20.2%から21.1%に、「ひとり親と子」の世帯は8.9%から9.7%へと割合がそれぞれわずかに上昇するが、その一方でかつての日本で40%以上を占めた「夫婦と子」は26.9%から23.3%に減少すると推計されている。

家族とは離別して独居状態にある人に対しては、家族に関するアセスメントツールは適用外となるかもしれないが、文章完成法の形式であれば、独居状態にある場合でも、項目から連想される内容を自由に回答することが可能である。そのため、様々な家族に関わる生活の様態がある中で、それぞれの状況における家族イメージにアプローチしようとする際に、文章完成法は、共通して用いることのできる形式となりうる。「単独」世帯の割合がより一般的になる現代の日本社会において、幅広い生活形態においても適用できる家族に関する研究のアプローチが必要である。

5. 本研究の目的

本研究においては、青年期以降の未婚者を対象として、自己と家族との関係について、文章完成法により調査を行う。先行研究により、自己と家族の関係に関する回答内容は多様となる傾向があり、荒井(2012; 2015)では調査対象とされていない青年期以降の未婚者に対して、今回の調査では対象とするため、先行研究における回答内容の分類カテゴリについて再検討を行う。

また、カテゴリに分類された回答に関して、年齢層、性別、家族との居住形態によって

特徴的な傾向が見られるかということについて検討する。

II. 方法

1. 調査の実施・対象者

2018年1月に、インターネット調査会社の保有する調査モニターで、未婚の男性156名(年齢範囲: 15歳～67歳, 平均年齢: 39.61歳 (SD = 15.86)), 未婚の女性156名(年齢範囲: 15歳～69歳, 平均年齢: 39.74歳 (SD = 16.19))を対象として、インターネット調査を実施した。年齢層については、10代・20代・30代・40代・50代・60代の各年代の男女ともに26名ずつが割り当てられた。文章完成法の項目への回答に先だち、調査の目的、および倫理的配慮に関する説明文が最初に提示された。

調査対象者の職業等については表1のとおりである。

調査対象者の同居家族については、両親(両親以外の家族の同居を含む)と同居は120名(38.4%), 一人親(親以外の家族の同居を含む)と同居は65名(20.8%), 親以外の家族と同居は28名(家族以外の者と同棲中の9名を含む)(9.0%), 同居家族なしは99名(31.7%)である。なお、親以外の同居家族としては、祖父母、きょうだい、甥、姪、(未婚で出産した)子ども、の場合があった。

年代による居住形態(表2, 表3)には、男女とも有意差が見られた(女性 $\chi^2(15) = 31.09, p < .01$; 男性 $\chi^2(15) = 43.89, p < .001$ いずれもイエーツの補正後)。残差分析により、10代では、両親と同居するケースが多く、独居

表1 調査対象者の職業(上段人数・下段%)

会社員	パート・ アルバイト	自営業	公務員・ 団体職員	学生	無職	その他
108	33	46	11	63	44	7
34.6	10.6	14.7	3.5	20.2	14.1	2.2

表2 年代ごとの居住形態（女性）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
両親	18	13	11	8	6	0	56
一人親	4	4	5	4	7	5	29
親以外	2	5	2	4	3	6	22
独居	2	4	8	10	10	15	49
計	26	26	26	26	26	26	156

表3 年代ごとの居住形態（男性）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
両親	19	11	16	13	3	2	64
一人親	6	3	5	2	9	11	36
親以外	0	0	0	1	1	4	6
独居	1	12	5	10	13	9	50
計	26	26	26	26	26	26	156

する場合は少なく、60代では両親との同居する場合は少ない傾向が見られた。男女とも概ね、20代から50代にかけては、年代による居住形態に差が見られなかった。

2. 質問項目

文章完成法により、自己と家族との関係に関して、「家の人はわたしに対して」、「わたしは家の人に対して」の2項目への回答を求めた。

教示文として、「以下の設問では、家族などについての書きかけの文章を完成させるように入力してください。入力欄の枠の上にある言葉を見て、あなたの頭に浮かんできたことを、その言葉につづけて入力欄に文章として入力し、書きかけの文章を完成させて下さい。」と提示し、例文の下に回答欄を設けた。

Ⅲ. 結果

1. カテゴリーの分類

カテゴリー数については、荒井（2012）を参考として、上位カテゴリーと下位カテゴリーを合わせて概ね10程度となることと、単一の

カテゴリーに該当する回答数が、調査対象者の少なくとも2%以上（312名の場合、7名以上の回答数）となること、「家の人はわたしに対して」、「わたしは家の人に対して」の2項目への回答の分類カテゴリーが共通のものに近づけると同時に、両者の分類カテゴリーの違いからそれぞれの特徴を捉えることを考慮して、各回答の分類作業を行った。また、ある1名の回答に対しては、複数のカテゴリーに重複して属する場合があるものとするが、1名の回答に対して同一のカテゴリーを重複してカウントすることはしないものとした。

1-① 各カテゴリーの説明と回答例

1-①-1) 項目「家の人はわたしに対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例

「家の人はわたしに対して」への回答内容の分類は、主カテゴリーとして、「関心のあり方」、「関わりの評価や行動全般」、「コミュニケーション・誠実性」、「不明」、「家族の不在」、「その他」とした。「関心のあり方」は、下位カテゴリーとして、「支持・受容・肯定的態度」、「要求・期待・依存」、「無関心・不満」、「厳格な態度・非難」の4カテゴリーに分類された。それぞれの分類カテゴリーに関する説明と回答例を表4に示す。

「関心のあり方」（以下、「関心」と記す。）は、家族が自己に関心をどのように向けるかに関わるカテゴリーである。下位カテゴリーの「支持・受容・肯定的態度」（以下、「支持」と記す。）は、家族と自己のよい関係に基づいて、家族が自己を支え、心身におけるケアや、肯定的な態度を示す内容の回答である。「要求・期待・依存」（以下、「要求」と記す。）は、家族が自己に奮起を期待する、サポートを求める、依存的な態度を示すという回答をまとめてカテゴリーとした。「無関心・不満」（以下、「無関心」と記す。）は、家族が自己に対して無関心

表4 「家の人はわたしに対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例

主カテゴリー	下位カテゴリー	カテゴリーの説明	回答例
関心	支持	家族が自己に対して支持、受容、肯定的態度を示している。また家族が、自己を気づかい、ケアしてくれる、自己に対して、愛情や感謝を示す、など。	「みんな優しく接してくれる」、「信頼と思いやりがある」、「協力的である」、「愛情がある」など。
	要求	家族が自己に対して何らかの要求をする、期待していることを示す。家族が自己に依存している、頼っていることを示す場合も含める。	「勉強面で期待している」、「堅実性を求める」、「頼っている」、など。
	無関心	家族が自己に対して、無関心である、関わりを持たない、不満を持っていることを示す。悪意や否定的な態度を示す場合を含む。	「無関心だ」、「冷たい」、「何もしない」、「うざいと思っている」など。
	厳格	家族が自己に対し、厳格な態度や非難を示す。家族からの関わりにプレッシャーに感じることを示す回答も含む。	「厳しい」、「しつこく質問責めしてくる」、「ストレスをかけてくる」など。
関わり		家族と自己の関係についての評価、家族による自己に対する行動を示す。家族と自己の中立的な関わりや、心理的距離を表す回答、また他のカテゴリーに属さない行動全般を含む回答について、このカテゴリーに含める。	「普通だ」、「自立していると思っている」、「干渉しない」、「知らないことが多い」、「さまざまな対応」など。
コミュニケーション		家族が自己に関わる際の言語コミュニケーションの様態を示す、または誠実な態度や素直さを示す。	「話しかけてくるのでわたしも話す」、「傷つけることを言う」、「誠実だ」など。
不明		家族が自己に対してどう思っているかがわからないことを示す。	「どう思っているのでしょうか?」、「わからない」など。
不在		同居している家族が不在であることを示す。	「だれもいない」、「家には自分しかいない」など。
その他		上記のカテゴリーに含まれない回答、主語が家族か自己であるかが不明なもの、項目に関わりがない回答、無回答に準じるものである。	「特になし」、「寂しい」、「末っ子」、「楽しみだね」など。

であるという回答と、否定的な感情を示す回答をカテゴリーとしてまとめた。「厳格な態度・非難」(以下、「厳格」と記す。)は、家族が自己に厳しい態度を示す、非難や圧力をかけるという回答をまとめた。

主カテゴリーの「関わり」の評価や行動全般(以下、「関わり」と記す。)は、家族と自己の関係についての認知的評価を示す回答、家族による自己に対する行動全般を含む回答で、残余的なカテゴリーとして意味づける。

「コミュニケーション・誠実性」(以下、「コミュニケーション」と記す。)は、家族が自己に関わる際の言語コミュニケーションの様態として、言語的な関わりかけを示す回答、自己開

示的態度、誠実な態度を示す回答をまとめたものである。

「不明」は、家族が自己に対してどう思っているかがわからないことを表明している回答である。

「家族の不在」(以下、「不在」と記す。)は、同居している家族が不在であるという回答であるが、「家の人はわたしに対して」という項目と繋げると文章にならない場合が多く、無回答に準ずるカテゴリーである。

上記のカテゴリーに含まれない回答、文章の意図が不明瞭な回答を「その他」カテゴリーとした。

1-①-2) 項目「わたしは家の人に対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例

「わたしは家の人に対して」への回答内容の分類は、上位カテゴリーとしては1)と同様に、「関心のあり方」(関心)、「関わり」の評価や行動全般」(関わり)、「コミュニケーション・誠実性」(コミュニケーション)、「家族の不在」(不在)、「その他」(その他)とした。「関心のあり方」は、下位カテゴリーとして、「支持・受容・

肯定的態度」(支持)、「不満・否定的態度」(以下、「不満」と記す。),「要求・期待・依存」(要求)、「甘え・負い目」(以下、「甘え」と記す。),「厳格な態度・非難」(厳格)、「無関心・無為」(以下、「無関心」と記す。),「役割・責任」(以下、「役割」と記す。)の7カテゴリーに分類された。それぞれの分類カテゴリーに関する説明と回答例を表5に示す。

主カテゴリーの「関心のあり方」(関心)の

表5 「わたしは家の人に対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例

主カテゴリー	下位カテゴリー	カテゴリーの説明	回答例
関心	支持	自己が家族に対して支持、受容、肯定的態度を示している。また自己が、家族を気づかい、ケアする、家族に対して、愛情や感謝を示す、など。	「とても信頼して頼りにしている」、「優しい」、「思いやる」、「感謝している」など。
	不満	自己が家族に対して、不満を持っている、また否定的態度を示す。悪意や攻撃の態度を示す場合を含む。	「不満を感じている」、「冷たい」、「思いやりが、ない」、「少し怒っています」、「反抗した」など。
	要求	自己が家族に対して何らかの要求をする、期待していることを示す。自己が家族に依存している、頼っていることを示す場合も含める。	「計画的にお金を使って欲しい」、「ちゃんと管理して欲しいといいたい」、「安心感を感じたい」など。
	甘え	自己が家族に対して甘えている、負い目があることを示す。また、自己が、自己中心的態度を示している場合も含める。	「甘えている」、「苦勞をかけている」、「態度がでかい」、「わがままである」など。
	厳格	自己が家族に対し、厳格な態度や非難を示す。家族を怒らすような指摘をする場合を含む。	「きつくあたってしまうときがある」、「少し厳しすぎるかも」、「老けたねと言って怒られた」など。
	役割	自己が家族内の役割を担っていること、家族内で義務や責任を負っていることを示す。	「買い物を担当している」、「介護の手伝いをしている」、「自分の能力に応じた責任がある」など。
	無関心	自己が家族に対して、無関心である、考えや感情を何も持っていない、何もしないことを示す。	「無関心」、「特に言うことはありません」、「特に何もしない」など。
関わり		家族と自己の関係についての評価、自己の家族に対する行動全般を示す。家族と自己の中立的な関わりや、心理的距離を表す回答、また他のカテゴリーに属さない行動全般を含む回答について、このカテゴリーに含める。	「普通だ」、「淡々と接している」、「干渉しない」、「冷静に見ている」、「自然体で接している」など。
コミュニケーション		自己が家族に関わる際の言語コミュニケーションの様態を示す、または誠実な態度や素直さを示す。	「あまり強く言えない」、「挨拶をした」、「素を出せる」など。
不在		同居している家族が不在であることを示す。	「一人暮らし」、「家の人はいない」
その他		上記のカテゴリーに含まれない回答、主語が家族か自己であるかが不明なもの、項目に関わりのない回答、無回答に準じるものである。	「子供はいません」など。

下位カテゴリーとして、「支持・受容・肯定的態度」(支持)、「要求・期待・依存」(要求)、「厳格な態度・非難」(厳格)については、前項1)におけるカテゴリーと同様の内容であり、家族と自己を逆にして、自己を主語とした回答と見なされる。自己から家族に対しての項目の場合、カテゴライズできる分の回答数があると判断したため、前項1)よりも、下位カテゴリーが3つ増えている。

1)では、「無関心・不満」としてまとめたカテゴリーを、「不満・否定的態度」(不満)と「無関心・無為」(無関心)の2カテゴリーに分けた。「甘え・負い目」(甘え)は、自己が家族への依存的な態度を甘えと認識している回答、家族への要求を自己中心的と認識して

いる回答、家族を頼ることを申し訳ないとする回答が見られたためカテゴライズした。「役割・責任」(役割)は、家族の中における役割から、家族に対する責任を負っていることを示す回答のカテゴリーである。

主カテゴリーである、「関わりの評価や行動全般」(関わり)、「コミュニケーション・誠実性」(コミュニケーション)、「家族の不在」(不在)、「その他」は、前項1)と同様のカテゴリーである。

1-②複数のカテゴリーに属する回答

1-②-1) 付加のカテゴリーとの複合的回答の例

荒井(2012)と同様に、単独のカテゴリー

表6 付加のカテゴリーの説明と複合的回答の例

付加カテゴリー	カテゴリーの説明	回答例
願 望	各回答に付加して、自己の欲求や願望を示す。	【家の人とはわたしに対して】「もう少し優しくしてもいいと思う」(「支持」と「願望」の複合)、「優しいな。わたしも優しくしよう」(「支持」と「願望」の複合)など。
		【わたしは家の人に対して】「感謝の気持ちを忘れないようにしたい」(「支持」と「願望」の複合)、「仲良くいてほしいと思う」(「支持」と「願望」の複合)
両価性	各回答のカテゴリーに付加し、回答内容がそれぞれ、次の場合に分類される。肯定的、否定的な意味の両面があり複雑なニュアンスを示す場合、極端さや過度な様子を示す場合、曖昧さを感じていることを示す場合、否定する、あるいは意味を逆転させる表現を示す場合である。	【家の人とはわたしに対して】「少し心配性だ」(「支持」と「両価性」の複合で、「心配」は、ケアと不安という両価性を含む。),「過保護な気がする」(「支持」と「両価性」の複合で、ケアの程度が過ぎる。),「自由にさせているようで、気にしている」(「関わり」と「支持」と「両価性」の複合で、関わり方に曖昧さがある。),「あまり期待していない」(「要求」と「両価性」の複合で、期待を否定している。)など。
		【わたしは家の人に対して】「無力である」(「関わり」と「両価性」の複合で、自己と家族との関わりがあるが、自己否定的で複雑な感情がある。),「愛がありすぎていい」(「支持」と「両価性」の複合で、過度の肯定的態度を示す。),「少しは親切で頼りにされていると思う」(「支持」と「両価性」の複合で、支持的な関係であるが、曖昧で複雑さがある。),「強制はしない」(「要求」と「両価性」の複合で、相手への強要を否定している。)など。
頻 度	各回答のカテゴリーに付加し、回答内容がそれぞれ、次の場合に分類される。「時々」、「しばしば」、「いつも」、など頻度を示す場合、過去、現在、未来という時間の流れの中での変化の有無を示す場合である。	【家の人とはわたしに対して】「いつも優しい」(「支持」と「頻度」の複合で、頻度が多い。),「とても世話を焼いてくれた」(「支持」と「頻度」の複合で、現在に至るまで変化していない。)など。
		【わたしは家の人に対して】「は、いつでも元気な姿でいる」(「支持」と「頻度」の複合で、肯定的態度を表す頻度が多く、変化していない。),「は、いろいろあったが、現在は特に問題ない存在であると思う」(「関わり」と「頻度」の複合で、家族と自己の関わりの評価が過去から現在で変化した。)など。

としては分類しないが、他のカテゴリーに付加した形で分類に加えられる付加カテゴリーとして、「願望」、「両価性・極端・不定」（以下、「両価性」と記す）、「頻度・時間的変化」（以下、「頻度」と記す）、を設定した（表6）。

「願望」は自己が主体である願望が回答に含まれている場合のカテゴリーである。「両価性」は、両価的な意味の内容を表している場合、前述の主カテゴリーや下位カテゴリーへの分類を曖昧にする要素が含まれている場合、極端すぎる内容である場合、カテゴリーの意味を否定して逆の意味を表す場合など、複雑で分類しづらいカテゴリーである。頻度は、頻度を表す言葉が使用されている場合、時間的経過の中で変化

を示す内容である場合のカテゴリーである。

1-②-2) 複数のカテゴリーに属する複合的 回答の種類

1-②-2) -a: 項目「家の人はわたしに対して」への複合的 回答

「家の人はわたしに対して」への複合的
回答は、49種類に分類された。そのうち、全体で1
名のみに見られた種類の複合的
回答は、30種類であった。2名以上の回答数が見られた残りの19種類の複合的
回答の種類について、表7に示す。

典型的なパターンの複合的
回答として、最も多くの回答数が見られた種類は、「支持・受容・

表7 「家の人はわたしに対して」への複合的
回答の種類

カテゴリーの複合	回答数	回答例
支持+関わり	16	「気を使う」、「礼儀正しい」、「自由にしてくれる」、「ご飯を作ってくれる」、「温厚」
支持+関わり+コミュニケーション	2	「口出ししないが気にかけてくれている」
支持+関わり+その他+願望	2	「家の人に対してもっと気を使って生活したい」
支持+関わり+両価性	2	「感謝が足りない」
支持+厳格+頻度	6	「ときに厳しくときに優しい」
支持+厳格+両価性	5	「とても甘いと思う。」
支持+頻度	3	「いつも優しい」
支持+両価性	7	「とても心配性である」、「過保護な気がする」
関わり+両価性	6	「適当な扱い」、「遠慮しているところがある」
関わり+要求+両価性	3	「過大な期待もしていなかったもので、大きな失望も感じていないと思う。」
関わり+不明	2	「結婚しないことをどう思っているのか」
関わり+コミュニケーション+要求+頻度	2	「早く家出て行けとよくいう。」
無関心+両価性	9	「不安でいっぱいかな」、「頑固者だと思っている」
無関心+関わり+両価性	4	「扱いづらい人間だと思って深く干渉してこない。」
無関心+コミュニケーション	3	「口をきいてくれない」
無関心+不在	3	「何も言いません。いないから」
要求+両価性	5	「あまり期待していない」、「少しは頼ってくれている?とは思います。」
厳格+要求	2	「ストレスをかけてくる」
不在+その他	2	「言葉はなくても大切に思ってくれている彼がいるから幸せです。」

肯定的態度」(支持)と「関わりの評価や行動全般」(関わり)の複合「支持+関わり」で、16名の回答をこの種類の複合とした。回答例としては、「気を使う」、「礼儀正しい」、「自由にしてくれる」、「ご飯を作ってくれる」、「温厚」などであり、支持的な関係に加え、距離を取っている関係や、具体的な関わり行動のカテゴリーにも当てはまると判断されたものである。また、「支持+関わり」に「コミュニケーション」、「その他+願望」、「両価性」のカテゴリーを加えた回答もそれぞれ複数見られた。「支持」を含む回答として、回答数が5名以上であったのは、「支持+厳格+頻度」の6名、「支持+厳格+両価性」の5名、「支持+両価性」の7名であった。

また、回答数が5名以上の複合的回答として、

「関わり+両価性」の6名、「無関心+両価性」の9名、「要求+両価性」の5名であった。

全体的な割合として、「支持」、「関わり」、「両価性」のカテゴリーを含む種類の複合的回答数が多い結果となった。

1-②-2) -b: 項目「わたしは家の人に対して」への複合的回答

「わたしは家の人に対して」への複合的回答は、73種類に分類された。そのうち、全体で1名のみに見られた種類の複合的回答は、54種類であった。

2名以上の回答数が見られた残りの19種類の複合的回答の種類について、表8に示す。典型的なパターンの複合的回答として、最も多くの回答数が見られた種類は、「支持・受容・肯定

表8 「わたしは家の人に対して」への複合的回答の種類

カテゴリーの複合	回答数	回答例
支持+願望	16	「優しくしたいと思ってます」、「感謝の気持ちを忘れないようにしたい。」
支持+頻度+願望	2	「いつまでも元気でいてほしいと願う」
支持+頻度	7	「いつも優しく接している」
支持+関わり	7	「協力的です。」、「なるべく気を使うようにしている」
支持+関わり+両価性	4	「協力はしているつもりだけど、反応がない。」
支持+両価性	7	「少しは親切で、頼りにされていると思う」、「心配。」
支持+役割	2	「家事の面からサポートしている」
不満+両価性	3	「冷たい態度になってしまう」
不満+頻度	3	「時々機嫌が悪い」
甘え+頻度	3	「苦勞を掛けてばかりだった」
厳格+コミュニケーション	2	「キツイ言い方をする」
役割+両価性	2	「役立っているのか疑問だ」
無関心+不在	5	「何もない。家族はいない。」
無関心+コミュニケーション	2	「沈黙を貫き、あまり心の中を明かさない。」
関わり+両価性	13	「もそこまで踏み込みたくない関係でいる」、「特別な存在とは映っていないと思う」、「わからない」
関わり+役割	2	「自分の能力に応じた責任がある」
関わり+コミュニケーション	2	「会話は欠かさないように心がけています。」
コミュニケーション+両価性	3	「唯一素を出せる」
コミュニケーション+願望	2	「誠実であろうと思う」

的態度」(支持)と「願望」の複合「支持+願望」で、16名の回答をこの種類の複合とした。また、「支持+頻度」、「支持+関わり」、「支持+両価性」は、それぞれ7名ずつの回答であった。

また、回答数が5名以上の複合的回答として、「関わり+両価性」の13名、「無関心+不在」の5名、「要求+両価性」の5名であった。

全体的な割合として、「支持」、「関わり」、「願望」、「両価性」、「頻度」のカテゴリーを含む種類の複合的回答数が多い結果となった。

2. 各カテゴリーに属する回答数の比較

各カテゴリーに分類された回答数について、年代別、性別、家族との同居形態による差を χ^2 検定によって検討した。

項目「家の人はわたしに対して」の各カテゴリーの回答数を比較したところ、表9のとおり、性別では、「支持」、「不明」については性差が有意であった。年代別では、「支持」、「厳格」、「不在」で年代による差が有意であった。居住形態別では、「支持」、「不在」で居住形態によ

る差が有意であった。

性別と年代の要因別に回答数の比較を行ったところ、「支持」については、男性のみ、年代による差が有意で($\chi^2(2) = 10.40, p < .01$)、50/60代男性は「支持」の回答数が少なかった。「厳格」については、女性のみ、年代による差が有意で($\chi^2(2) = 10.17, p < .01$)、10/20代女性は「厳格」の回答数が多かった。「不在」については、女性のみ、年代による差が有意で($\chi^2(2) = 15.10, p < .001$)、50/60代女性は「不在」の回答数が多かった。

項目「わたしは家の人に対して」の各カテゴリーの回答数を比較したところ、表10のとおり、性別では、「不満」、「無関心」、「願望」については性差が有意であった。年代別では、「支持」、「関わり」、「不在」で年代による差が有意であった。居住形態別では、「支持」、「無関心」、「不在」で居住形態による差が有意であった。

性別と年代の要因別に回答数の比較を行ったところ、「支持」については、男性のみ、年代による差が有意で($\chi^2(2) = 10.30, p < .01$)、

表9 「家の人はわたしに対して」のカテゴリー別回答数(クロス集計)

		関心				関わり	コミュニケーション	不明	不在	その他	両価性	頻度
		支持	要求	無関心	厳格							
性別	女性	87	12	25	16	30	7	4	9	16	30	9
	男性	60	15	23	9	34	11	16	6	23	23	8
	χ^2 値	9.38**	.36	.10	2.13	.31	.94	7.69**	.63	1.44	1.11	.06
年代	10/20代	63	5	12	17	18	8	3	1	11	11	10
	30/40代	47	11	20	5	24	6	9	1	11	23	5
	50/60代	37	11	16	3	22	4	8	13	17	19	2
	χ^2 値	13.28**	2.92	2.36	14.96***	1.10	1.42	3.31	16.97***	2.11	5.09	6.10*
居住形態	両親	64	12	19	15	29	10	6	0	9	23	12
	一人親	30	10	10	4	17	4	4	1	8	9	3
	親以外	18	1	1	1	4	2	2	1	4	3	0
	独居	35	4	18	5	14	2	8	13	18	18	2
	χ^2 値	10.70*	5.55	2.56	3.88	5.38	2.93	.42	19.17***	4.73	.96	6.35

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

表10 「わたしは家の人に対して」の 카테고리別回答数 (クロス集計)

		関心								コミ ニケー ション	不在	その他	願望	両価性	頻度
		支持	不満	要求	甘え	厳格	役割	無関心	関わり						
性別	女性	65	19	2	16	4	11	19	27	15	12	7	25	26	19
	男性	50	9	5	8	6	7	36	39	16	9	8	13	26	7
	χ^2 値	3.10	3.92*	.58	2.89	.41	.94	6.38*	2.77	.04	.46	.07	4.32*	.00	6.04
年代	10/20代	52	11	2	10	5	3	17	14	10	1	3	11	14	6
	30/40代	37	11	3	6	5	6	17	28	12	4	4	13	19	11
	50/60代	26	6	2	8	0	9	21	24	9	16	8	14	19	9
	χ^2 値	14.07***	1.96	.01	1.08	3.33	3.18	.71	6.00*	.50	19.30***	2.94	.42	1.15	1.59
居住 形態	両親	58	13	2	6	7	7	14	28	14	0	5	15	24	10
	一人親	20	8	1	9	2	6	7	13	8	0	3	8	12	5
	親以外	15	1	0	4	0	0	5	6	0	2	1	1	3	1
	独居	22	6	4	5	1	5	29	19	9	19	6	14	13	10
	χ^2 値	20.30***	1.98	.79	5.08	2.99	1.69	12.69**	.62	2.51	33.84***	.13	1.41	1.79	.53

***p<.001 **p<.01 *p<.05

50/60代男性は「支持」の回答数が少なかった。「不在」については、女性のみ、年代による差が有意で ($\chi^2(2) = 12.12, p < .01$)、50/60代女性は「不在」の回答数が多かった。

3. 複数カテゴリーに属する回答の出現頻度

複数カテゴリーに属する回答は種類が多く、回答数が1名のみのもので多いため回答数のクロス集計による整理のみ行い、 χ^2 検定は行わなかった。

49種類に分類された、項目「家の人に対して」への複合的回答に関して、性別、年代別、居住形態別に回答数を検討し、群別の差が顕著であったカテゴリーとして、性別では、「支持+厳格」を含む複合的回答で、女性の10名に対して、男性は2名の回答数であった。

また、73種類に分類された、項目「わたしは家の人に対して」への複合的回答に関して、性別、年代別、居住形態別に回答数を検討し、群別の差が顕著であったカテゴリーとして、「支持+願望」の複合的回答で、女性は12名に

対して、男性は4名という回答数であった。

その他の複合的回答は、年代別、居住形態別による、複数カテゴリーに属する回答数の傾向として際立ったものは認められなかった。

IV. 考察

1. 回答内容の分類カテゴリーについて

SCTの「家的人是わたしに対して」、「わたしは家の人に対して」の両項目への回答内容の分類に関して、今回、荒井(2012)のカテゴリーから、いくつかの変更を加えた。両項目とも、「要求・期待・依存」、「厳格な態度・非難」は、回答内容に即してカテゴリー名称を若干変更した。また、同じく名称を変更した「関わりの評価や行動全般」のカテゴリーは、家族と自己の関係について、上下関係や心理的距離を表す回答、肯定的、否定的、両価的とも判断されない中立的評価を含む回答、または具体的な事実や行動を含めた回答と判断された場合にカテゴリー化したため、残余的なカテゴリーとして、様々な意味が混合している。

両項目とも、「家族の不在」のカテゴリーを

設定したが、今回は、中高年の未婚者を調査対象者に含めたこと、また独居している者の割合が高くなったことから回答数が一定以上となったと考えられる。

項目「家の人はわたしに対して」の回答のうち、「不明」カテゴリーは、今回、新たに設定したカテゴリーであり、家族の自己に対する考えや気持ちがわからないとする回答の数が20となったこともあり設定した。

項目「わたしは家の人に対して」への回答内容では、「甘え・負い目」のカテゴリーを今回新たに設定した。今回、青年期以降の未婚者が対象として調査を行ったことから、家族に対する自立と依存に関する葛藤に関して、甘えや負い目として認識して回答数が多くなったと考えられる。家族から依存されることに葛藤や戸惑いを感じるとする回答は、複合的回答である「要求+両価性」に分類したが、回答数は5であった。それに対して、自己が家族に対して「甘え・負い目」を感じるとする回答数が24であったことと比較すると、自己が家族に依存することの葛藤や戸惑いを感じる場合の方が多いと考えられる。この点は、今回の調査対象者である青年期以降の未婚者における家族関係の特徴を示している。

幅広い年代の未婚者を今回の調査対象者としたことにより、新たなカテゴリーを設定することになったが、家族との関係において様々な居住形態にある場合の調査でも本研究の分類カテゴリーの適用可能性が広がったと言える。

2. 複数のカテゴリーに属する複合的回答について

複数のカテゴリーに属する複合的回答の種類が多くなることは、家族と自己の関係の複雑さ、多様さを示している。項目「家の人はわたしに対して」への複合的回答のうちの典型的なパターンの一つであった「支持・受容・肯定的

態度」と「関わりの評価や行動全般」の複合的回答では、「気を使う」、「礼儀正しい」、「自由にしてくれる」など、支持的でありつつ距離を取る関係を示す回答が含まれた。この支持的かつ距離を取る関係性は、青年期以降の未婚者の家族との関係の特徴的な一面を示している。また、次に回答数が多かった「無関心・不満」と「両価性」の複合的回答では、「不安でいっぱいかな」、「頑固者と思っている」という回答例から、家族が自己に対して、どう関わってよいか不安や戸惑いを感じている様子が窺えるもので、これらも青年期以降の未婚者における家族と自己の特徴的な関係を示していると考えられる。同年代の既婚群との比較により、その検証を行うことが可能である。

項目「わたしは家の人に対して」への複合的回答のうち、典型的なパターンの一つであった「支持・受容・肯定的態度」（支持）と「願望」の複合的回答では、「優しくしたいと思っています」のような回答が見られた。このパターンの回答については、女性において多く見られる傾向があったが、女性の未婚者に特徴的な回答であるか、今後の検証が必要である。その他のパターンとして「支持+頻度」、「支持+関わり」、「支持+両価性」などが挙げられ、これらは肯定的な家族関係の一面を示している回答であるが、青年期以降の未婚者に限らず、一般的な傾向であるかもしれない。この点も、今後、同年齢の既婚者群との比較により、このような複合的回答のパターンについて検討を行いたい。

3. 各カテゴリーに属する回答数の比較

項目「家の人はわたしに対して」の各カテゴリーの回答数を比較したところ、「支持」については、特に、50/60代男性の回答数が少なかったため、高齢に近い未婚男性においては、家族からの支持的な関わりかけが少ないことが

予想される。一方、未婚の女性においては、家族からの支持的、肯定的な関わりについて、年代による変化は見られなかったことから、女性においては年齢に関わらず肯定的な家族関係を維持する傾向があると考えられる。居住形態別では、残差分析より、「両親と同居」、「親以外の家族と同居」群は、「支持」の回答が多く、「独居」は少ない傾向が認められた。以上により、家族との同居は、家族から支持的、肯定的な関わりが得られやすいことを示す結果となった。

家族の考えや感情を「不明」とする回答に関しては男性に多く、青年期以降の未婚男性の場合、家族との関わりが少ないことが影響して、家族の自己に対する見方がわからないことになる可能性がある。

家族からの関わりが「厳格」であるとする回答は、10/20代女性で多く、若年層の未婚女性は家族から厳しく見られる傾向が示された。

項目「わたしは家の人に対して」の各カテゴリーの回答数を比較したところ、「不満」とする回答と「願望」を付加する回答は女性に多く、「無関心」とする回答は男性に多い傾向が見られた。また「無関心」の回答数から、独居状態では、家族との関わりに関心が払われない傾向が明らかになった。

家族への「支持」の回答は、年代別では若年層ほど多く、居住形態では両親と同居群が多かった。年齢が若く、両親との同居している群で、家族に対する支持的な関わりが顕著であるという結果であるが、年齢が高く、両親と同居である場合についても、調査対象者を増やした調査によって検討する余地がある。

自己から家族への関わりについての認知的評価や具体的な行動を示す「関わり」の回答数は、10/20代の若年層では少なかった。若年層では支持的、肯定的な回答は多いが、中高年層では、中立的、客観的に家族への関わりを評価

する傾向が高くなると考えられる。

両項目に対して家族がいないと回答する「不在」では、特に50/60代女性の回答の割合が高く、高齢の未婚女性において、同居家族の不在によって、項目に回答しづらくなると推察される。同居家族がいない場合には、家族に関する調査そのものに対する抵抗があると考えられるが、このような場合のために教示方法を検討することが必要である。

4. まとめ

本研究においては、荒井（2012）における家族に関する文章完成法の回答内容の分類カテゴリーについて再検討を行うこと、青年期以降の未婚者を対象とした家族との関係の特徴を検討することを目的として調査を行った。近年、日本社会で増加傾向にある、独居状態の単身世帯や、中高年の未婚者で出生家族との関わりも少ない場合には、家族心理学研究に関するアプローチが困難であると考えられたが、文章完成法を使用することにより、同居群や若年群とも同様に、多様な回答が得られることが明らかになった。それと同時に、同居家族の不在から、項目に回答しづらい場合も多いことが示された。そのため、より回答しやすくなるような質問形式や教示における配慮について検討することが必要である。

また、今回は、青年期以降の未婚者を対象としたが、今後は、年齢的に対応している既婚群との比較により、父親や母親としての立場における家族関係や家族イメージの特徴について検討してゆきたい。

引用文献

- 荒井真太郎（2012）文章完成法における家族イメージの表現内容の分類 佛教大学教育学部論集, 23, 107-129.
- 荒井真太郎（2015）家族と自己の関係についてのSCTの回答パターンー大学生を対象としてー日本家族心理学会第32回大会・於山形大学 発表論文集.
- 馬場禮子（1990）家族の心理臨床 鐘幹八郎・馬場禮子（編）家族と社会（臨床心理学体系4）金子書房 pp.1-39.
- Hamilton, E. & Carr, A. (2016) Systematic Review of Self-Report Family Assessment Measures. Family Process, 55, 1, 16-30.
- 星野良一（1984）老年期のうつ病と神経症の心理学的特徴に関する研究 日本老年医学会雑誌, 21, 5, 470-476.
- 岩田裕子・森恵美・前原澄子（1998）父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因 日本看護科学会誌, 18, 3, 21-36.
- 国立社会保障・人口問題研究所 人口統計資料集 2018 Retrieved from <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2018.asp?chap=0> (2018年11月11日)
- 国立社会保障・人口問題研究所 日本の世帯数の将来推計（全国推計）Retrieved from http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2018/hprj2018_PR.pdf (2018年11月12日)
- 中尾達馬・加藤和生（2003）愛着スタイルにより家族表象は異なるだろうか？ 日本教育心理学会第45回総会発表論文集 438
- 岡本裕子（1996）育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学誌, 47, 9, 849-860.

（あらい しんたろう 臨床心理学科）